

Y I C看護福祉専門学校

令和7年度 第1回看護学科教育課程編成委員会 議事録

日時：令和7年10月22日（水）15：30～16：30

場所：5階 カンファレンスルーム

委員出席者

- A 山口県看護協会会長
- B 看護学科実習病院看護部長
- C 看護学科 卒業生

学内出席者

- D 校長
- E 副校長
- F 事務長
- G 看護学科 学科長
- H 学科長統括
- I 看護学科教員（書記）

1. 校長挨拶

本会は、学校教育の中核となるカリキュラムについて、広く意見を交換する場である。本校も志願者がどんどん減ってきているという現状がある。この現状に対し、特にカリキュラムに関して以下の3点を強化し、達成していく必要がある。

1. 学生満足度を上げること。
2. いかに魅力あるカリキュラムにするかということ。
3年間という限られた期間で工夫し、魅力的かつ、学生が達成感を味わえるようなもの
にすること。
3. 教員が個々の学生に対して、個別にかつ丁寧に指導していくこと。

特に実習や国家試験対策などにおいて、さらに充実させていくことが重要である。

学校側が気づきにくい点を指摘してもらうため、外部の視点から意見をいただくことを期待する。

2. 委員自己紹介

3. 議事

議長：規定第6条により E が行う

- (1) 令和6年度卒業生及び職場の上司アンケート調査結果・・・資料Ⅰ－1、資料Ⅰ－2
- (2) 令和6年度卒業生ホームカミングデー実施結果・・・資料Ⅱ－1、資料Ⅱ－2

G : (1) (2) 続けて資料に沿って説明

<質疑応答>

- A 委員：令和 6 年度 卒業生及び職場の上司アンケート調査結果に関するアンケートの回収率（上司）について、上司の回答数 37 名は、24 箇所からの依頼に対し、学生一人ひとりについて書いてもらった結果（延べ 37 名）という解釈で正しいか。
- G：ご質問の通りである。
- A：令和 6 年度 卒業生ホームカミングデーの実施結果について参加者 9 名に対して、アンケート回収が「5 名」とあるが、集計を取った人数は「6 名」である。データが 5 名分だったのか。
- G：上司数の解釈は正しい。ホームカミングデーの集計は 6 名分として取った。資料Ⅱ-2 の回収率 5 名を 6 名に訂正をお願いしたい。アンケート自体を打ち忘れた学生がいたため、回収率が低くなった可能性がある。
- E：結果を見られて、卒業生を受け入れてくださっているが実際の姿はいかがでしょうか。
- B：回収率が低いのは申し訳ないと感じる。厳しい意見もあるが、学生個人のキャラクターもあると考えている。ある学生は最初の配属部署では何もできなかったが、研修で回った別の部署で丁寧な指導を受け成長し、元の部署に戻った例もある。指導者側の問題も少なからずあると感じている。その新人職員に合わせた指導を時間かけてゆっくりやっついていかないといけないと思っている。
- E：実際、今の新卒の看護師は、5 年前や 10 年前と比べて、技術の習得状況やコミュニケーション技術には何か変化を感じられているか。
- B：5 年、10 年前と比較して、技術やコミュニケーション能力に大きな変化はなく、個人の差が大きい。個人に合わせた指導を時間をかけて行う必要がある。
- E：Y I C で学んでよかったと思われることはあるか。
- C：在学中に「何でも先生に相談できる環境」があった。それが病院就職後、上司とのコミュニケーションの取りやすさ、声のかけやすさにつながった。現在の後輩も積極的なコミュニケーションができています。
- E：山口県内における大学や養成校の数は人口の割合に比べて多く、そのなかで養成校は養成校の役割として、どのように看護師を育てていくのかを今しっかり考えさせられている時期にあると思っている。C 委員には、3 年間での学校生活を立ち返った時に、なぜその専門学校を選んだのかをご紹介していただきたい。
- C：社会人になって看護師を目指す際、大学は選択肢になかった。専門学校は相談しやすい環境であり、社会人が頑張れる環境がここだと感じたため Y I C を選んだ。
- E：3 年間のカリキュラムを振り返ってみて、ご意見いただきたい。

- C : 国家試験の勉強は2年後半から3年にかけて時間をかけたが、大学生と比べて時間が足りないという焦りがあった。ただし、自分の生活スタイルには合っていた。
- E : 看護協会の方では、看護基礎教育4年制の動きがありますが、養成校の3年間のカリキュラムをどのようにお考えか。
- A : 看護協会では基礎教育4年制の動きがあるが、地域によっては3年制や准看護師養成のニーズはまだある。単純に3年制がダメというわけではなく、地域の医療提供体制を途切れさせないために、養成のあり方を整理し考える必要がある。今、志願する人は選ぶ道がたくさんあるが、どのように選択したらいいのかはよくわからないまま選んでいるところもあるので、その辺も整理する必要がある。

議題(1)(2)について、全員一致で承認した。

(3) 令和7年度看護学科教育計画の進捗状況

G : 資料Ⅲに沿って説明

<質疑応答>

- A 委員 : 1年生から国試対策を行っていることに敬意を表す。配信問題の選定や提供など、教員の介入と時間が非常に多くかかっているのではないか。教員側の負担はどうか。
- G : ホームルームの時間を確保し、月1~2回、または放課後や昼休みの隙間時間(10~15分)で学習支援を実施している。とくに学習状況を確認することに力を入れている。
- H : 特に成績低迷者に対しては、成績の分析を業者が行うが教員も分析し、面談を重ねて勉強方法を細かく指導しており、素直に受け入れる学生は成績が伸びている。しかし、国家試験への危機感が持てない学生への対応が難しい。
- E : 養成校の学生は、自律的な学習が苦手な傾向があるため、1年生のときから丁寧な関わりが必要である。教員は、自分の授業準備よりも国家試験対策に時間を割いており、教員負担の増加が懸念される。
- B : 教員の方々が細かく指導されていることに感謝する。教員がモチベーションを保つための支援も必要ではないか。現場では、業務はできても国試になかなか通らない准看護師の例もあり、いかに学生に「通るぞ」というやる気を出させるのが難しいと感じている。
- E : 卒業生から国試対策に関するご意見をいただきたい。

- C : 在学時の国試対策のテキストは紙媒体であった。チューター制度について、途中で担当教員が変更になった。個人的には、1年間同じ先生の方が学習状況の把握がしやすかったと感じている。
- E : 学習方法には個人差があり、時として学生と教員間にミスマッチが生じる。学生に逆効果となるようなペアリングは、学習効果を鑑みて変更することがある。
- E : 毎年、特に1年生の退学者が多い。がんばる意欲を持ち入学してきたにも関わらず、こんなはずじゃなかったと退学している現状がある。1年生に対して、どのような支援があれば退学を防げるか、卒業生に意見を求めたい。
- C : 国試の勉強も含めてよく相談に乗って頂き、何でも相談できる環境だったのでこれ以上のことはない。

議題（3）について、全員一致で承認した。

4. その他

特記事項なし

第2回教育課程編成委員会は令和8年2月に開催予定